

# トゲクリガニ増殖試験

中田 凱久・福田 慎作・塩垣 優・小川 弘毅

本試験は、陸奥湾産の地域特産種として重要度の高いトゲクリガニの生態を把握することにより、増殖手法を検討する基礎的知見を得ることを目的として実施した。

## 1. 天然採苗試験

### 方 法

- 1) 試験場所：当センター前の実験筏、水深4 m
- 2) 試験期間：平成元年1月25日～同年5月19日
- 3) 採苗器：次の付着基質をタマネギ袋（網目合2×4 mm）に入れて3種の採苗器を作製した。  
①中古マス流網 ②ネトロンネット3枚 ③ネトロンネット1枚
- 4) 設置方法：実験筏から1本の幹綱に水面下1 m間隔で3 m層まで3層に垂下したものを採苗器の種類別、時期別に表1に示したように1月下旬から3月上旬の間に設置した。

### 結 果

採苗器は5月18～19日の両日に一斉にとりあげ、1採苗器当りの付着稚ガニ個体数を調査した。

投入時期別、水深別、採苗器別の採苗結果を表1に示した。稚ガニの全平均採苗数は73個体/採苗器であり、過去4ケ年のうちでは最高であった。

投入時期別にみると今回の投入時期の範囲内では全体的に時期の違いによる差は認められなかった。

次に水深別にみると-1 m層で採苗器当り92個体と多く、-2 m層、-3 m層では63～64個体と減少し、例年同様表層に近い程付着個体数が多い傾向がみられた。

又、採苗器別の1袋当りの平均個体数ではマス流網が92個体と最も多く、次いでネトロンネット3枚が88個体、同1枚が42個体の順となっていた。

以上の事から本種の増殖を考える上で、天然採苗による稚ガニの確保はある程度可能

表1 天然採苗試験結果

月	日	採苗器	-1 m層	-2 m層	-3 m層	1採苗器当り付着数
1	5	A	163	113	76	73.9
		B	96	56	60	
		C	39	30	32	
25	18	A	119	61	66	67.1
		B	102	71	62	
		C	55	38	30	
2	5	A	70	69	74	55.1
		B	68	77	56	
		C	40	13	29	
6	18	A	81	78	100	82.1
		B	193	80	89	
		C	45	33	40	
11	18	A	169	80	83	68.7
		B	64	76	36	
		C	59	20	31	
2	5	A	124	84	88	74.1
		B	78	64	67	
		C	69	50	43	
21	19	A	97	71	57	75.0
		B	140	96	61	
		C	64	54	35	
3	5	A	—	—	—	94.0
		B	131	96	185	
		C	51	62	40	
8	19	A	—	—	—	73.8
		B	131	96	185	
		C	51	62	40	
1採苗器当り付着数			92.0	64.0	62.6	73.8

A：マス流網 B：ネット3枚 C：ネット1枚

であり、

①採苗適期はメガローバ期幼生の出現は3月中旬に多い事(62年度調査結果)等から採苗器投入は3月上旬までに行えば良い。

②採苗器設置場所としては沿岸の表層域(表面下-3m以浅)が適当である。

等の事がわかった。

一方天然採苗により得られた稚ガニ(平均甲長約6mm)約5000尾はFRP水槽(140×65×27cm)に収容し、餌料としてイカナゴ切身を1日1回残餌が出るように与え飼育した。11月下旬までに甲長25.2mmに成長したが、翌年3月取上時の甲長は31.6mmであり冬期間の成長はあまりみられなかった。

また、生残率は取上時1%台にとどまり(飼育初期の減耗が大きい)、今後中間育成等を考える上で飼育管理法の見直しが必要と思われた。